**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第７３回　（２０２１年３月１４日）**

**・勉強範囲：「第三章　ヴィディヤー・シャーゴル訪問」４０頁**

　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～

**（前回までの勉強）**

バクティ・ヨーガの「神への愛を深める実践」に関連して、ナーラダの『バクティ・スートラ』の１１の助言のうち、１２月、１月、2月の勉強会で第９の助言まで説明しました。

①　神の栄光を描写する

②　神の美しさを愛する

③　神のお世話、儀式、礼拝を好きになる

④　神をいつも思い出していたい

⑤　召使いが主人をお世話するように神に仕えたい

⑥　神を友達のように愛する

⑦　神を我が子のように愛する

⑧　神を伴侶のように愛する

⑨　私のすべてのものを神に捧げたい（アートマニヴェーダナ）

［👉『ナーラダ・バクティ・スートラ　～信仰の道についてのナーラダの格言集～』p161］

**（⑨についての訂正）**

atma-nibhedanaの板書の綴りが違っていたので訂正します。正しくはatma- nivedanaです。

　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～

**（今回の勉強：⑨の続き）**

アートマニヴェーダナの続きで、今日は「すべてのカルマとカルマの結果（カルマ・ファラ）を神に捧げる」について説明します。

身体を捧げるプラナームや、菓子や果物を捧げる供物と違い、「カルマとカルマの結果」は精妙なものです。それをどのように捧げるというのでしょうか？　ホーリー・マザーはイニシエイションを授けるときに「今生と前世の全ての罪をシュリー・ラーマクリシュナに（或いはホーリー・マザーご自身に）捧げてください」とおっしゃいました。意味は、今生と前世におかした罪をすべて取り除きますということです。そのシンボルの１つが花で、シュリー・ラーマクリシュナの写真に花を捧げる、ホーリー・マザーの御足に花を捧げるなどを行いました。それを喜ぶ信者がいた一方、母には良い物しかあげたくないという愛情からホーリー・マザーに罪を捧げることはできないという信者もいましたが、それでもホーリー・マザーは「大丈夫ですから捧げてください」とおっしゃいました。

なぜカルマとカルマの結果を捧げるのでしょうか？　１つの理由は「すべては神から頂いたもので、カルマとカルマの結果も神に頂いたものだから神に捧げる」、もう1つはヒンドゥ教における人生の目的、すなわち解脱のためです。解脱とはカルマとカルマの結果に束縛されていない状態です。ですからそれらを捧げるのです。なぜなら良いカルマも悪いカルマもカルマはすべて、自由への解放（＝ムクティ、解脱）を妨げる魂の鎖ですから。

毎日の仕事（カルマ）を毎日神に捧げてください。またそうしなければ、カルマの口座にカルマがどんどんたまってしまうでしょう。ですからたとえば夕方の祈りの時、瞑想の時、プラナームをする時に、シュリー・ラーマクリシュナに、神に、「私の今日のすべての仕事、正しくない仕事も正しい仕事もすべてをあなたに捧げます」──ではどのように？　心で捧げればよいのです。外に表現する必要はありません。なぜなら神は心にお住まいですから。

この時、行ったカルマが正しいとか正しくないという区別をせずにカルマ全体を捧げてください。「あのカルマは正しくなかった」と思い出すことにより、捧げものに悪い印象がついてしまいます。それを防ぐためです。しかし必ずあとで深く内省をします。

それはどのような内省ですか？──あなたが神に祈っている内容と、自分が実際にしている行動とが一致しているか矛盾しているかを内省するのです。たとえば「うぬぼれを取り除いてください」と祈っていても、あなたは素晴らしい仕事をしている、素晴らしい本を書いている、料理が上手だなどと褒められるとき、嬉しくなり喜んでいるようなら、それはアートマニヴェーダナではありません。他人があなたの才能、あなたの良い性質を褒めるとき、本当はそれらは神のものであるのに自分の才能を褒められて嬉しいと感じるなら、それはアートマニヴェーダナではありません。他人に称賛を期待することも、他人が自分を批判したら気分を害することもアートマニヴェーダナと反対の行為です。このようにいつも内省し、自分の心の反応を厳しく見つめなければなりません。

『バガヴァッド・ギーター』は称賛や批判に対して「無関心であること」（indifference）を助言していますが、称賛や批判が耳に入ったら心は自然に反応してしまいます。「無関心」を実践するのは簡単ではありません。そこでバクティ・ヨーガのもう1つの方法「神に捧げる」が私たちに勧められているのです。わざわざ口に出して「ナーハムナーハムトゥフートゥフー」（＝私ではない、私ではない、あなた（神）です、あなたです）と言わないで、心で神に捧げてください。

ある僧が自分にうぬぼれが出る可能性があるので信者からプラナームを受けることを拒んでいました。それに対して先輩の僧が、「信者はあなたにプラナームしているのではない。あなたの中にシュリー・ラーマクリシュナがいるとイメージをしてあなたにプラナームしているのです」と言いました。それがニヴェーダナです。

シュリー・ラーマクリシュナは自分の甥（兄の息子）、ラームラール（ラームラールはドッキネッショル寺院のカーリー聖堂の司祭であった）に「ラームラール、気をつけてください。あなたは私の甥ですから皆が誉めそやすでしょう。またあなたはマザー・カーリーの司祭ですから皆があなたにプラナームするでしょう。褒められたりプラナームされた時、すぐにマザー・カーリーの名前を唱えてください、ジャイマー、ジャイマー、ジャイマーと。すると自分が褒められているのではない、自分がプラナームされているのではないと気づき、称賛やプラナームをマザー・カーリーに捧げることができます」。当時、シュリー・ラーマクリシュナの名は世の中に知れ、ドッキネッショル寺院を多くの人が訪れていました。

**ナーラダの１１の助言⑩　神との同一への強い憧れ、焦燥**

次は、自分の心が神と同一（identification）することへの強い憧れです。それはタット・ガタ、タット・マヤと言い、今まで何回も話してきたことです。このタットは「タット・トワム・アシ」と同じタットで、前後関係により「ブラフマン」や「神」という意味になります。

（板書）

Tat-twam-asi

twamは「あなたは」、「タット・トワム・アシ」はグルが「弟子よ、あなたはブラフマンです」と教えています。今の状態はtat とtwamが別々ですが、それが１つになるとtwamの存在はなくなり神（tat）だけとなります。それがタット・ガタ、タット・マヤの状態です。［👉2020年10月福音勉強会にタット・ガタの詳しい説明があります］

（板書）

Tat-gata

Tat-maya

ガタの意味は「行く」、タット・ガタは「私のすべてはtatに行きました」という意味です。「私のすべて」の一番の中心的なものは「心」なので、「すべての心を神に向けて、いま神と１つになりました。自分の存在はありません」というのがタット・ガタの状態です。

マヤの意味は「いっぱい」です。「心はブラフマンでいっぱい、ブラフマンだけでいっぱい、別のものがない、全部が神」それがタット・マヤ（タンマヤ）です。

タット・ガタとタット・マヤ。それが信者の理想的な状態であり信者の目的です。⑨のアートマニヴェーダナでは「身体も心もすべて捧げる」でしたが、⑩では「心」が強調され、「心のすべてで神だけを考えている」ことが重要なポイントです。普通の人の心はある部分は仕事のこと、ある部分は家族のこと、ある部分は友達のことというように分割されていますが、そうではなく心はただ１つのもの「神だけ」で満たされています。それがタット・マヤです。

ちょっとイメージしてください──ある店に行くことが目的で出掛けましたが、途中のおいしそうな店やおもしろそうな場所に寄り道をしてしまいました。寄り道をしている時には「ある店に行く」という目的を忘れてしまっています──。

（板書）

śara-bat tat-maya bhavet

「シャラバット・タンマヤ・バヴェッﾄ」はそれに関連したウパニシャドの助言で、シャラは「矢」です。矢は的に向かって一直線に飛び、途中で寄り道をしません。目的地（＝的）だけのことを考え、まっすぐそこへ向かいます。

心は矢です。心はそれほど神だけを考えています。それがタット・ガタ、タット・マヤの状態です。それが信者の理想であり、瞑想の理想的な状態でもあります。

‘シャラバット・タンマヤ信者’ は神だけを考えています。いかなる仕事の時も神とつながっています。外から見るといろいろな仕事をしているように見えても──祭のとき、ある人は供物を準備しある人は礼拝のものを準備しある人は花を準備しますが、またサラリーマンの仕事、主婦の仕事と色々な仕事がありますが──すべての仕事の中心はただ１つ、神です。仕事も、人間関係も、中心は神です。神と仕事、神と人間関係などに心を分けず、常に神だけとつながっています。

ブリンダーバンのゴーピーたちはシュリー・クリシュナが吹くフルートの音が聞こえると、夫、子供たち、自分の仕事、自分の身体さえ忘れてシュリー・クリシュナの元へと向かいました。後で誰にどのような批判をされるか、どのような問題が起こるかなど考えもしないśara-bat tat-maya bhavetの状態でした。彼らの矢（心）が向かう先はクリシュナです。ちなみにクリシュナという名前は「アーカルシャン」（＝ひきつける、attract）から来ています。クリシュナはこのように信者の心をひきつけるからです。

では、タット・ガタ、タット・マヤを、シュリー・ラーマクリシュナはどのように表現していましたか？

**［👉『福音』P10上段L10］**「神は、次の三つの魅力の集まった力で、に引かれる信者に御姿を現される──世俗の人にとっての財産の魅力、母親にとってのわが子の魅力、および貞淑な妻にとっての夫の魅力である。もし人がこれらの三つの魅力の結合した力で神に引かれるなら、それによって彼を悟ることができるのだ。要は、まさに母親がわが子を愛するように、貞淑な妻が夫を愛するように、世俗の男が富を愛するように神を愛することである。これら三つの愛の力、これら三つの魅力を合わせて一つにし、それを全部神に向けよ。そうすればお前は、間違いなくを見るだろう」

世俗的な人はいつも世俗的なことに没頭しています。ジャドゥ・マリックは食事の時、人に「このカレーは塩がきいてなくておいしくないですよね？」と言われるまでカレーの味に気づきがありませんでした。そこまで味がわからなかったり、何を食べているかに気づきがなかったり、食べたかどうかさえ忘れるほどの状態になることがあります。心が仕事にśara-bat tat-maya bhavetだからです。また母親の赤ちゃんに対する心もそうです。身体は赤ちゃんから離れて家事をしていても、心は常に赤ちゃんのことを考えています。「世俗の人にとっての財産の魅力、母親にとってのわが子の魅力、貞淑な妻にとっての夫の魅力」は皆に経験があります。だからシュリー・ラーマクリシュナはそれらの例を使い教えたのです。

**ナーラダの１１の助言⑪　神を悟りたいがまだ出来ていないという心の痛みを忘れない**

助言の最後は、「神を悟りたいが、まだそれができていないために心がとても痛いという状態を忘れない」ということです。まず、「神をまだ悟ることができないため非常に心が痛い」ということが大事なポイントです。これは、時々痛むという程度ではなく、シュリー・ラーマクリシュナが経験したような激しい痛みです。

シュリー・ラーマクリシュナは「マザー・カーリー、あなたはまだ私の前にあらわれない」と顔を土にこすりつけて嘆き悲しみました。「あなたを見ぬまままた今日も一日が過ぎていく」と激しく泣きました。しかし私たちは寝る前に突如「神様、また一日過ぎました」とそれを真似て、その後ぐっすり眠ることができます。しかしシュリー・ラーマクリシュナはそうではありませんでした。心はとてもとても大変でした。［👉『ラーマクリシュナの福音』序論；『ラーマクリシュナの生涯』上巻］人間関係に例えると、恋人にとても会いたいが会えない状態、あるいは母が子に会えない状態ですが、それらは世俗の一例です。

この、神に会えなくて心が痛い状態は単に心が痛いだけでなく、その痛みがずっと続く深い痛みです。その痛みを感じるだけでなく、その痛みを常に忘れず覚えていたい──それがこの助言のポイントです。それほどの神を悟ろうという強い憧れ、焦燥感がなければ、先に進むことはありません。

タゴールの有名な歌があります。これは私も大好きな歌です。歌詞を紹介します。

「神様、今生私はまだあなたを見ていない。あなたに会えていない。目覚めているときも、眠っているときも、あなたに会えないという心の痛みを忘れずにいたい。今生が無駄にならないように、いつもそれを思い出していたい。

「私はこの世界というバザール（市場）でたくさんのものを買ったが、どんなにたくさんの買い物をしてもまだあなたに会えていない。そして心は痛い。私はこの心の痛みをいつも忘れないでいたい。

「その場所まではとても遠い。私は歩いていくが時々疲れて休む。だが目的の道半ばであることを忘れてはいけない。疲れたからあきらめるということはしない。

「私の部屋は楽器、音楽、遊び、飾りものでいっぱい。だがあなたはまだ私のうちに来てくださらない。私の心は痛い。その痛みをいつも忘れないでいたい。痛みをいつも思い出していたい。

タゴールの素晴らしい歌です。一番の近しい人、親しい人、避難所は神です。その彼にまだ会えていないのはとても心が痛いことではありませんか？　会えなければ今生が無駄になります。だから一番愛している、一番大事、一番近しい、そして永遠の避難所である神に私は会いたい。会えない心の痛みが続いて欲しい。忘れないように、いつも心の痛みを思い出したい。なぜならあなたに会えていないから──この状態が神への愛を深めます。

以上がナーラダ・バクティ・スートラの1１の助言です。

『福音』の本文に戻ります。

**📖読み****『福音』４０頁下段L１１**

*（ヴィディヤー・シャーゴルに）「あなたが行っている活動は良い。*

**（解説）**

2019年8月および2020年1月の勉強会でヴィディヤー・シャーゴルについて紹介しました。本名はイッシャーラチャンドラ。世間から「ヴィディヤー・シャーゴル」「ダヤー・シャーゴル」と呼ばれた有名な方でした。Mさんも『福音』の中で彼の紹介をしています。

（板書）

Vidyā-sāgar

ヴィディヤーは「学問」、ヴィディヤー・シャーゴルは「学問の海」。「海の水がいっぱいであるように、学問の知識がいっぱい」な彼は高い学識を持った学者でした。しかしそれだけなら特別ではないし、シュリー・ラーマクリシュナが訪問しようと思わなかったでしょう。それに学問をする目的が名声や金銭であったら、高い空を舞うが地上の屍を狙うハゲタカと同じです。ヴィディヤー・シャーゴルは違いました。彼にはダヤーという特徴もありました。

（板書）

Dayā sāgar

ダヤーは「慈悲」、ダヤー・シャーゴルは「慈悲の海」。彼の慈悲に関する逸話はたくさんあります。神への興味はありませんでしたが、とても両親思いで道徳に価値を置く方でもありました。未亡人に関する法律の制定にも奔走しました。

ヒンドゥ社会の伝統では、カーストの関係で結婚相手を自由に選ぶことができませんでした。女性は子供のうちに結婚するケースも多かったのです。しかし夫がかなり年上の場合、結婚してすぐに亡くなることもあり得、すると8歳、10歳で妻は未亡人となり、その年から一生未亡人としての社会のしきたりに従って生活しなければなりませんでした。そのしきたりとは髪を短くする、白いサリーしか着ない、装飾品は付けない、肉や魚は摂取してはいけないなどかなり厳しいもので、それに従わないと社会はその人をとても批判したのでした。ですが考えてみてください。自分の母親や姉妹が普通にしていることを、その小さい女の子ができないということはその子にとってとても辛いことではありませんか？

ヴィディヤー・シャーゴルは彼女たちに同情と慈悲を感じ、また非人道的でもあるということから、多くの聖典にリファレンスをして、未亡人を守る法律を作るように当時の政府（当時はイギリスが統治していました）に働きかけたのです。

ヴィディヤー・シャーゴルはシュリー・ラーマクリシュナよりも年上で、シュリー・ラーマクリシュナの生まれ故郷からさほど遠くないところに住んでいたため、シュリー・ラーマクリシュナは子供の頃からヴィディヤー・シャーゴルの噂を聞いていました。そして挨拶が叶った場面が『ラーマクリシュナの福音』の第三章です。

ダヤーとマーヤーについて、『福音』の中で、シュリー・ラーマクリシュナはこのように語っています──マーヤーとは自分と関係がある人を愛すること、ダヤーは自分と関係ない人を愛すること──。マーヤーは自分の家族だけ、自分の国だけ、自分の宗教だけ、ダヤーは自分の家族も、国も、宗教も、そして人間だけでなく動物もです。ヴィディヤー・シャーゴルは動物にも慈悲心を持っていました。

また人々の教育にも熱心でした。子どもたちにベンガル語を教えるために本も買いました。政府系大学の学長でしたが、上役と意見が合わずに辞職して自分の学校をつくりました。ヴィディヤー・シャーゴルは自由を重んじるタイプでもありました。次を読んでください。

**📖読み　『福音』４０頁下段L１２**

*もしそれらを無私の精神で、うぬぼれを棄て、自分が行為者であるという思いを棄てて行うことができるなら、非常によろしい。*

**（解説）**ここはとても重要な箇所です。

１つ質問をします。ボランティアをするグループにNGOや赤十字、ライオンズクラブなどの団体があります。また、ラーマクリシュナ・ミッションやカトリック僧院の団体もあります。その二者の違いは何ですか？

（参加者）ラーマクリシュナ・ミッションはカルマ・ヨーガですよね。すべて悟るためにおこなっているというのが目的だと思います。

シュリー・ラーマクリシュナはこのように言いました。もちろん困った人を助ける、手伝うというのは素晴らしいことです。ですがそれとは別に、人を助ける行為を称賛されることで行為者にうぬぼれが生じる可能性があります。またお世話をしている相手から感謝の言葉を聞きたいなど行為の見返りを期待する可能性があります。名声欲を得たいと思う可能性もあります。期待した通りの見返りが得られないと、ボランティアをする気持ち（やる気）が続かなくなる可能性もあります。自分の「エゴ」がそのボランティア活動を好きでなくなったら、活動をやめたいと思うようになるのです。なぜなら活動の中心が自分のエゴだからです。シュリー・ラーマクリシュナはそれに気を付けなさいと言いました。

エゴのない奉仕、それがカルマ・ヨーガです。自分のエゴをなくして神を喜ばせるために活動をしたら、死ぬまでその活動は続くでしょう。エゴが行う奉仕とエゴのない奉仕。両者は同じ奉仕活動であっても、目的と動機がまったく異なります。もう一度読んでください。

（読む）もしそれらを無私の精神で、うぬぼれを棄て、自分が行為者であるという思いを棄て……。

無私。セルフレス。うぬぼれがない。エゴがない。自分のためにしない。それからまた？

（読む）自分が行為者であるという思いを棄てて行うことができるなら、非常によろしい。

自分が行為者、I am the doer.と考えることなく仕事をします。それが理想的な仕事のやり方です。もちろん他人を助けるなど、良い種類の仕事をするのは良いことです。そして良い仕事を、自分が行為者であると考えずに仕事をするのは非常に良いことです。なぜなら良い仕事でも、エゴがあると、後になって失望、苦しみ、悲しむ可能性があるからです。ヴィディヤー・シャーゴルの晩年がそうでした。

ヴィディヤー・シャーゴルはコルカタでたくさんの人をお世話しました。ある人は自分の学費の相談に、ある人は自分の子どもの結婚の相談に、ある人は病気の治療費の相談にヴィディヤー・シャーゴルの元へ行き、ある程度の金銭を稼いでいたヴィディヤー・シャーゴルは彼らにお金をあげることもありました。しかし後になって、まるで「お金を貸した人たちがヴィディヤー・シャーゴルを批判する」ことがルールにでもなったように、一斉にその人たちはヴィディヤー・シャーゴルを批判したのです。ヴィディヤー・シャーゴルは都会の人々に失望し、晩年をコルカタから遠く離れた田舎の貧しい部族社会で過ごしました。

良い仕事であっても、どのような仕事でも、神を中心に行ってください。神の道具になり仕事をすれば、批判も称賛も自分とは無関係になります。神の道具になり、力も才能も神からの頂きものと思って使い、神を喜ばせるために仕事をし、結果を含めてすべてを神に捧げれば、批判称賛が気にならないだけでなく、心が徐々にきれいになりうぬぼれもなくなります。心がきれいになれば、神があらわれます。今は心が欲望や執着といったエゴで汚いので神が見えませんが、きれいになればおのずと神を見ることができます。同時に至福もあらわれます。今、それとヴィディヤー・シャーゴルの晩年の状態とを比べてください。

（賛歌奉献）「ラーマクリシュナ　ナーモヤニヨ」（👉 映像の２：００：００位）　　以上